

のない愛しい声だった。

衝動に任せて視線を向ければ、聞き間違いでなかったことに啞然とした。

不在の心配はしていたが、まさか道中で鉢合わせるとは思っておらず、ぎこちない様子で向けた顔は、瞬く間に困惑色に染まった。

「・・何やってんだよ、あのバカ」

どう見ても仕事からしき姿に、不満気に顔を歪めたイギリスは、ゆらりと進行方向を変えていく。

久しぶりの逢瀬を心の支えに、必死に仕事を片付けて、休暇を挽ぎ取ってきたのに、その片割れは、まだ仕事の最中とは、何とも頭が痛い状況だった。

相手を考えれば、約束自体を忘れている可能性も高く、やり場のない不安と畏怖が交差する。

栗立つ心情はすぐには収まらず、先程まで緩んでいた頬が、強張るばかりだった。

不穏な空気を吐き出しながら歩み寄るイギリスに、スペインは満面の笑みで迎えてくれた。

「よお、もう来てたん？早いやん」

笑い声混じりで告げるスペインに、約束の時間よりも随分と早かったことを思い出したイギリスは、僅かに朱を帯びた頬を隠すように目を逸らした。

「よ、用事が早く終わって、時間が空いたただけだ」

咄嗟に嘘で取り繕うイギリスを他所に、偽りの有無すら気に留めないスペインは、言葉通りに受け取った。

「そくなんや、ほな、俺もはや終わらせなあかんね」

薄く微笑んだスペインは、意気揚々と木箱を持ち直すと、そのまま横を通り抜けていく。

そして、近くに停車しているトラックへ、木箱を運び込む姿に、思わず怪訝じみた声が零れた。

「・・何してるんだ？」

トラックの荷台にいた者達が、運んだばかりの大きい木箱を、更にパズルのように奥へ詰めていく。

その様子を確認しながら、さも当然のように答えた。

「オレンジ運んどるねん」

倉庫からトラックへ木箱を移動させている最中なのは、説明されずとも分かるが、イギリスが言いたいのは、そんな単純な話ではない。

「そんくらい見りや分かる！そくじゃなくてだな、忙しいなら・・今日は・・その、」

徐々に重く沈んでいく言葉は、最後まで言い切ることなく途切れてしまった。

何週間も前から楽しみで、この日を指折り数えていた分、浮かれ切っていた気分が、僅かに陰っていく。

切なさや悲しさが、心に重く沈殿していく中、それでも、軽々しく帰るとは言いたくなくて、緩々と目を伏せた。

しかし、本当に忙しいなら、迷惑をかけてまで居座るのも心苦しくて、どうするべきか悩み始めたイギリスを他所に、スペインからは能天気な微笑まれてしまった。

「暇なんやったら手伝ってさ、そしたら、もつと早よ終わ